

眼内腫瘍アトラス

後藤 浩 著

後藤浩教授の『眼内腫瘍アトラス』(Atlas of Intraocular Tumor)を外來の診察室に置かせていただき、この本のありがたさを日々痛感しております。

何よりも、その豊富な眼底写真、前眼部写真、画像診断の所見、病理組織所見に合わせて、具体的かつ的確な解説が全ての症例において記載されています。眼科の日常臨床においては、眼内腫瘍の経験の少ない先生方が大半だと思います。診断名がわからない外來患者がおられたら、まず、『眼内腫瘍アトラス』を手に取り、パラパラと1ページずつ、写真を1枚1枚見比べていきましょう。豊富な症例が記載されていますから、必ず似た所見の写真と解説を見つけることができます。そこから診断治療も含め、かゆいところに手が届く本書の解説を参考に患者さんに説明をしましょう。必要であれば、後藤教授をはじめとする眼腫瘍専門医に紹介することもできます。

また、眼内腫瘍は、全身疾患の部分症状として現れることも多いのですが、本書にも続発眼内リンパ腫や白血病の眼内浸潤が記載されています。他科の腫瘍診療においては、診断治療の際に内視鏡や外科的な生検による病理診断が必須であり、これにより初めてその患者の診断がつき、治療が始まります。その一方で眼球という組織は、視機能を守る観点から、その一部を採取し病理組織標本で診断をつけることがとても困

難です。生検が困難な場合でも、適切な治療をいち早く開始するために、眼内腫瘍がどのようなものであるかということを他科の先生に説明するに際して、従来は根拠となる権威ある教科書がありませんでした。しかし今後は、そのようなときにも、この美しくかつ重厚な装丁で、写真の美しさとわかりやすい説明を併せ持つ本書が手元にあれば、眼内腫瘍を他科の先生に理解いただく上でも、大きな効力を発揮することでしょう。

このように『眼内腫瘍アトラス』は、医師の先生方が、外來・日常診療で想定していない眼内腫瘍に遭遇した場合に備え、手元に置いておくべき一冊のバイブルです。なお、後藤教授の『眼瞼・結膜腫瘍アトラス』(医学書院, 2017)も、併せて外來に置いておくと、眼球の内外の腫瘍に“鬼に金棒”な状態を作れることを申し添えさせていただきます。

後藤教授、ならびに東医大の先生方、素敵な2冊の教科書を世に送り出していただきましたこと、心より御礼申し上げます。

信大教授・眼科学
村田敏規

A4・頁226 2019年10月
定価：本体12,000円＋税
[ISBN978-4-260-03892-8] 医学書院刊